



女優の渡辺美佐子さんと石川雅己千代田区長

第5部

未来に 向かって

女優 渡辺美佐子・千代田区長 石川雅己 対談

戦争のない平和な社会を若い世代に引き継ぐために

戦後70年、戦争を体験した方々のお話を聞く機会はますます貴重なものとなっています。

原爆で亡くなった子供たちの手記を語る朗読劇を続ける渡辺美佐子さんは、戦争の頃は小学生でした。

千代田区長・石川雅己は終戦時は4歳。その時何があったのかを若い世代に伝え、平和の尊さを未来に語り継ぐことの大切さを語り合いました。

今も鮮明な空襲の記憶

石川 今日は、戦争体験を振り返り、また渡辺さんが続けておられる朗読劇のこと、若い世代に伝えたいことなどお話しただけだと思います。よろしくお願いします。

渡辺 そうですね。こうした機会はとても大事だと思っています。石川さんは、戦争の頃のことと覚えてらっしゃらないですよ。

石川 私は昭和16（1941）年2月生まれで、終戦時は4歳でした。だから戦争の記憶はほとんどないんです。

渡辺 私はしっかり覚えていますよ。

石川 私は後輩ですね。いろいろ教えていただかなくては。

渡辺 私は終戦の時は12歳でした。小学校を卒業する年です。3歳上の姉の場合は女学校に入った途端に戦争になって。だから姉は全

く勉強していません。4年間毎日、鉢巻きを締めて真空管を作っていたんです。聴く音楽は軍歌。映画も国威称揚のものばかり。翻訳の本も出ていない。文化やロマンチックなことは何も知らず、戦争が終わってさあ結婚となっても、相手になる青年は皆亡くなっていて。本当に姉たちの世代は犠牲者というか……。独身を通された方も多いですね。

石川 戦争中は、娘さんらしい楽しみもなく学徒動員で過ごされて。

渡辺 そして戦後、音楽や映画がどっと入ってくるでしょう。演劇も始まるし。姉はそれまでの分を取り戻すように観ていましたね。1人では気が引けるといっているので、中学生になった私も連れて。おかげで芝居や映画、いっぱい観ました。女優になったのはそれがきっかけですよ。俳優座養成所の募集要項を偶然手に入れて、受けたら受かった。

石川 もともと東京のお生まれですね。激しい空襲も体験されましたか？

渡辺 戦争も最初のうちはまあまあ平穏な暮らしでした。厳しい状況になったのは昭和18（1943）年か19（1944）年頃です。空襲は今もはっきり覚えていますよ。焼夷弾というのはもう、豆まきみたい。細いものがヒュルヒュルと音をたててばら撒かれます。爆弾はザーツという音です。これは怖いですが。焼夷弾は直接当たらないかぎり、まず死なないんですよ。住宅街には爆弾はめったに落とさなくて、ほとんど焼夷弾でした。

終戦の年の1月くらいからは、毎晩12時になると必ず空襲警報が鳴っていました。枕元に防空頭巾とカバンを置いて寝て、警報が鳴ると半分眠ったまま防空頭巾をかぶり、父が庭に掘った小さな防空壕に入るんです。中はじめじめしていて狭く、焼夷弾のヒュルヒュ

ルや、ドッカーンという地響きが聞こえるのが怖くて。それで私、外に出ちゃうんです。すると、不謹慎に聞こえるかもしれませんがけれど、きれいなんですよ、とても。サーチラ



イトがばあつと夜空を照らし、ライトをつけた飛行機が飛んでいて。父は屋根に上がり、火の粉が飛んでくるたびバケツの水を含ませた藁で叩いて消していました。私ははしごに上ってバケツを父に渡したり。そういうことをしていれば全然怖くありません。壕で音だけ聞いていると怖いし息苦しいし。結局、私の家がある一列だけが焼け残りました。いちばん端にあった鉄筋造りの立派な洋館は、戦争が終わると家ごとソ連に取られました。

家でステーキを焼いていた米兵たち

石川 疎開はしなかったんですか？

渡辺 私は末っ子で甘えん坊だったので、学童疎開には行きませんでした。でも昭和20（1945）年の3月、4月、5月は空襲がひどかったですよね。3月の大空襲では下町で大勢の方が亡くなって、私が住んでいた麻布では5月。たまりかねて母と姉、私の3人で信州の篠ノ井という町に疎開しました。

石川 疎開先は親類の家ですか？

渡辺 うちが松本が本家だったんですが、父方なので母がご遠慮申し上げ、お手伝いさんの実家を頼りました。

石川 食べるものはありましたか？

渡辺 東京ほどひどくはありませんでしたが、疎開者に分けてくれるような食べ物はある

りません。でも東京は本当に何もなかったですね。もともと田んぼも畑もないし、輸送も止まって。終戦をはさんだ何年間か、日本であんなに飢えていたところはありませんね。

石川 疎開先ではどうしていたんですか？

渡辺 東京に残った父が毎週、配給のたばこを1箱送ってくれ、それを農家に持って行ってリングと換えていました。お米じゃなかったですね。毎日リングばかり食べていました。そんな経験なさらなかったでしょう？

石川 僕は昭和19年に札幌の親類のところへ疎開しました。その記憶はないんですが、どうしてか鮮明に覚えているのは青函連絡船のトイレに行くとき、穴の底に海が見えてすごく怖かったこと。その後ずっと乗り物が苦手になりました。疎開先の話は戦後に母からよく聞かされました。リングも食べていたらしいです。食べ物を獲得するため、持っていた着物もずいぶん手放したと言っていました。

渡辺 終戦で東京に帰ってきてても食べ物がなく、母がなけなしの着物を持って農家に行くお供をして、武蔵小金井にも何度も行きました。お米はもらえなくてお芋でしたね。

石川 食べ物を手に入れるのは本当に大変だったんですね。

渡辺 母はどこからか手に入れた大豆を炒って、毎朝新聞紙で作った袋に一握り入れて「1日分よ。ゆっくり食べなさい」と渡してくれているんです。それを1日ポリポリ食べていま



石川 雅己（千代田区長） 東京都立大学法経学部卒業後、1963年に東京都庁入庁。千代田区企画課長、東京都港湾局長、東京都福祉局長を歴任し、1999年東京都庁を退職。首都高速道路公団理事を経て、2001年千代田区長選挙に当選し、区長に就任。現在まで就任4期目を務める

た。東京に焼け残った家は少なく、私の家には2階に1間だけ洋間がありました。そこに進駐軍の将校さんが入ってきました。台所とトイレは共通です。私が大豆を食べていると、台所からジャージャーと音がして、いい匂いがするんです。ステーキを焼いているんですよ。私たち日本人は牛肉といえば肉じゃがが、せいぜいお客様の時のすき焼きくらいしか知

りません。空きっ腹にはすごく強烈な匂いでした。また、朝台所に行くと、アメリカ軍のうんと長い食パンがゴミ箱にポンと捨ててある。手を出してはいけないことは知っているの。でも目がね、真っ白いパンに吸い付かれたように離れないんです。

石川 それはひもじい子供には残酷な…。

渡辺 父が設計し、父1人が残って守った家でしたが、それから1カ月半くらいで出て、慌ただしく三鷹に越しました。あんなに大事にしていた家なのになぜ？と思いましたが、両親は辛かったんだなあ。うちは兄が3人いて、皆戦争からなんとか帰ってきました。その3人の負けた兵隊が学校にもどこにも行けず、お腹を空かせてうずくまっている家の2階で、戦争に勝ったアメリカの兵隊さんがステーキを食べている。親にはたまらなかったでしょう。

戦争は心に大きなダメージをもたらす

石川 食べることに汲々としていた時代でしたね。私が小学校に入った頃は周りにけっこう空き地があり、日曜には、そこで父がやっていた家庭菜園を手伝いました。でもろくなものができないんですよ。畑ではなくて空き地を耕しただけだから。

渡辺 うちも作っていました。今では見たこ

ともないようなヘンな菜っ葉とか。

石川 芋もナスもカボチャも、ありとあらゆるものの出来が悪い。人糞を撒くんですが、たいしたものにはなりません。そういう時代の記憶があるから、今ブームの家庭菜園も、なんとなくやる気になれないんです。小さい時の社会状況というものは強烈に残りますね。食べ物の苦労は特にそうです。

渡辺 母親というものは、子供が元気でががつ食べているのを見るのがなにより幸せなんです。だから当時のお母さんたちはどんなに辛かったでしょうか。時々配給もありましたが、隣組7、8軒に白菜1個とか大根3本といったふうに来ました。当番になると大変なんです。8軒の皆が集まっている中で等分に切らなければなりません。包丁を持つ母の手が震えていたのを覚えています。

私は子供の頃、よく倒れていました。貧血だと思っていたんですけど、大人になってレントゲンを撮った時に、結核をやっていますねと言われました。結核と栄養失調で倒れていたわけです。中学校に入ってから健康でしたよ。毎日1袋の大豆で食いつなぐ間に結核も治っちゃったんですね。

石川 私も戦後、ひどい風邪と熱で、父が医者を駆け回り、やっとペニシリンを持っていく医者を見つけて命を取り留めたといいます。当時、ペニシリン1本の値段は月給1カ月分だったそうです。戦争そのものを体験し



渡辺 美佐子 (女優) 1953年「ひめゆりの塔」で映画デビュー。58年「果てしなき欲望」でブルーリボン賞助演女優賞受賞、97年紫綬褒章、2004年旭日小綬章を受章。100本以上の映画に出演する傍ら、1985年より続けている朗読「夏の雲は忘れない 1945ヒロシマ・ナガサキ」など、平和に関する活動を多数行っている

ていなくても、私たちの世代はそういう話を直接聞けたわけです。父はしばしば晩酌をしながら軍隊での話もしました。昭和19年くらいに最後の徴兵で召集されたんです。あんなに不条理なものはない、家族のためにどうしても生きて帰らなければと思った、と。あの頃は「またか」と思っていました。戦争というのは、子供にも大人にも大きなダメージ

を与える。そうした経験を伝える大切さは、大人になってからだんだん分かってきました。た。

渡辺 私が忘れられないのは小学生の時の体操の時間です。駆けっこやラジオ体操をしていたのが、ある時から棒を持たされ、エイッとエイツって突くようになりまして。もしも敵の兵隊が来たら、その棒で突くんだと。その時はそういうものかと思っていました。とにかく命が軽かったんです。兄たちが出征する時も母は泣きません。元気で帰ってらっしゃいとも絶対言えない。そういうことをしてはいけないんだというのが染みついていたんです。命とは尊いものであり、人を殺すとは大変なことだということを知らない。戦争になると、すべてが正義になってしまふ。日本は勝つんだ、お国のために命を捨てるのは当然のことだと皆が思い込まれていました。それがいかに恐ろしいことか。小学生が鉢巻きを締めて、人を殺す訓練をしているんですよ。

広島で亡くなった「水瀧くん」

石川 渡辺さんは広島・長崎の原爆で亡くなった子供たちの手記を朗読されていて。千代田区でも平成27(2015)年3月に公演

してもらいました。本当に素晴らしい活動だと思います。始められたのはどんなきっかけからなのですか？

渡辺 戦争中の話になります。私が小学校5年の頃は皆疎開していて、何百人もいた生徒が15、16人になっていました。そこにめずらしく転校生が来たんです。帰り道が同じで、毎日、後になり先になり歩いていました。すごくかわいい子でしたよ。小麦色の肌でほっぺがリングゴのように赤くて。でも、話をしたことはありません。胸につけた名前の「水」と「瀧」の字だけ分かったので、私は密かに心で「水瀧くん」って呼んでいました。それがあの日、ふっといなくなっちゃった。疎開したのかなあと思っていました。その子のことがずっと忘れられなくて、その後何度かあったクラス会でも皆に聞いたのですが、「水瀧くん」のことは誰も知りませんでした。

石川 短い間だけの転校生だから誰も覚えていなかったんでしょうか。

渡辺 やがて女優になり、戦後35年目にテレビの「ご対面」番組に出る時、誰か会いたい人を聞かれてその子の話をしました。そして当日、私もおばさんになったけれど、彼もおじさんになったろうなとドキドキしながら待っていますと、カーテンの陰から出てらしたのは白髪のおじいさまとおばあさまでした。水瀧くんのご両親だったんです。

石川 それでは水瀧くんはもう…。

渡辺 初恋の男の子の名は水永龍雄^{みなながたつお}くんでした。龍の字を瀧^{たき}と書いていたんですね。ご両親は戦争中は満州にいて、龍雄くんは中学受験のため東京に行っていたけれど、空襲が激しくなったので広島に疎開したそうです。「終戦後ずいぶんたって帰ってきた時には、もう龍雄はいませんでした」と。8月6日、龍雄くんたち中学1年生は建物疎開の作業に従事していました。その場所が原爆の爆心地直下だったんです。遺体も遺品もない。目撃者もない。龍雄くんが死んだことを証拠立てるものはなにもないんです。だから、いまだにお墓も作れませんとおっしゃるんです。ショックでした。辛いことを思い出させてしまい、本当に申し訳ございませんとお詫^{わがや}びしたら、「私たちは転勤が多く、龍雄には友達もいなかった。12歳で亡くなった龍雄を知る者は家族しかおりません。なのに35年も忘れない方がいてくれて、龍雄は本当に喜んでいてのことでしょう」と言ってくれました。

石川 ご両親にお会いできたことは本当によかったですね。

渡辺 はい。その時から私は原爆がいかに恐ろしいものか、知識ではなく自分自身の身近なこととして感じるようになりました。私にできることはないか、ずっと考えていました。すると戦後40年目、知人の演出家の方が、唯一の被爆国である日本の演劇人として何かはじめようと声をかけてくれたんです。資料が

たくさん送られてきました。中に『いしづみー広島二中一年生全滅の記録』という本がありました。もしや…と巻末をめくって亡くなった321人の名簿を見ますと、いたんです、水永龍雄くんが。ああ、龍雄くんが私を呼んでくれている。そう思いました。

石川 その時から手記の朗読劇を？

渡辺 ずっと続けています。戦争に反対する気持ちはもちろんですけど、個人的には私は龍雄くんのために30年間やってきたんだなあと感じます。最近は中学生にも一緒に読んでもらっているんですよ。

石川 平成27年の3月に一緒に読んだ子供たちも、本当に心に響いたようです。

渡辺 今の若い人は、ご両親は戦争を知らないし、祖父母と一緒に住んでいないから戦争を話してくれる人がいないでしょう。だから皆すごく新鮮に驚くんです。そんなことが日本であったのかって。体験した方たちの手記、戦争詩人たちの詩、アメリカから来て戦争を記録したカメラマンの話…朗読にはそうしたものが入っているんですが、ある中学生は、「私は今反抗期でお母さんとケンカをしているけれど、明日からは仲良くします」と言ってくれました。そんな内容はどこにもないんですよ。でもそういうふうを受け取ってくれるの。戦争反対と声高に言うのでなく、家族や友達とのなんでもない日常がいかに大事かということを感じ取ってくれる。それが平和

の原点だと、私は子供たちから教わりました。

原爆を作った町ハンフォードで

渡辺 原爆が落ちてから70年、世界ではどこも戦争で原爆・水爆を使っていないですよ。広島で20万人、長崎で9万人が亡くなったと言われていますけれど、そのあまりの凄^{すさまじ}さがあるから、どこも落とそうとはしない。犠牲になった何十万人の人が、防波堤になっ^なてきているのだと思います。



国際平和都市千代田区宣言 20周年記念事業として 2015年3月14日に開催された「平和のつどい…未来へ」の様子。若者による平和メッセージの発表や、渡辺美佐子さんによる講演や朗読も行われた



毎年7月に行われる戦没者追悼式では、高校生が司会を務める

石川 今も、原爆を経験して生き残った方が多くが、憲法9条こそ私たちの命だとおっしゃいます。そういうお話には非常に重みがあります。二度と戦争をしないと誓いは、まさにその方々が作った宝物だと思えます。渡辺さんは長崎の原爆を作った町ハンフォードまで訪ねられたそうですね。

渡辺 終戦50年目の時です。アメリカ・ワシントン州のハンフォードは戦争中、原爆を作るためにできた町で、長崎に落とされた原爆のプルトニウムはここで精製されました。鉄条網で囲まれた広大な敷地に真っ黒な工場があるのですが、今はそこで何をしているかというと、「大量に作ってしまったプルトニウムをどうやって固化し、漏れ出ないように

にするか」なのです。苦心^{くしん}惨憺^{さんたん}しながらもなかなかできない。原爆を作った時よりも高いお金をかけて取り組んでいました。

石川 町の人の話も聞かれた？

渡辺 いろんな人に会いました。バスケットボールをしている高校生は、揃いのジャントパーを着ていました。背中にはキノコ雲の絵が入ってる。私は足が震えましたね。原爆はいちばん強い。僕らもいちばん強いチームになりたいからだと言ってますよ。町では、劇中のいくつかの詩を英訳を添えて読みました。高校生の女の子など、原爆がそんなひどいものとは知らなかったと泣いていました。片やキノコ雲の男の子に「日本に落とされた原爆をどう思う？」と聞くと、すごくいいことだったと言います。おかげでアメリカの青年たちは命を落とさなくてすんだし、日本も滅びなかったじゃないかと。本当にそう信じているんです。

あるおばあさんは地図を作っていました。町では工場の風下に病気が多発しているんだそうです。おばあさんは不思議に思い、なにかのあたりではないかと、誰が白血病になり、流産し、がんになったと、すべて地図に書き込んでいました。もう、見ればあきらか。でも、それを声高に言った農家の人は孤立していました。なぜだと思えます？

石川 なぜなのでしょうか？

渡辺 風下にはアメリカンチェリーの栽培地

があるんです。そのほとんどは日本に輸出されています。公になつたらチェリー農家はダメになっちゃう。だから緘^{かん}口令^{めい}が敷かれています。厳しく情報を統制されている。恐ろしいことです。すべてが透明で、誰もが分かっている中でそれぞれが判断していくという世の中にならないと。私の若い頃は何も知らされない情報統制の中で生かされていたから。そういうことのない社会にぜひともしていかねければというのが切なる願いです。

継承していききたい不戦の思い

石川 千代田区ではこの20年、毎年、中高生10人ほどを広島・長崎・沖縄に平和使節団として派遣しています。現地を見て、語り部さんの話も聞きます。帰ったら報告を聞くのですが、皆、行く前と表情が違いますね。これから自分たちに何ができるか、どうやって平和を作っていくか、真剣に語ってくれるんです。

渡辺 教科書や本で読んできたこととはまるで違いますからね。最近、安保法制が改正になって、それまで政治に全然興味なかった高校生や大学生が自主的に集まって、戦争反対を訴えています。聞きますと、東日本大震災の時に自分たちの日常生活がいかに簡単に壊されていくか分かったのだそうです。天災



は仕方がないけれど、戦争は自分たちがノーと言えば防げると気づき、それから参加する人が増えたんだといえます。普通の生活が人間にとってなにより大切なんだと感じて活動する人に触れ、すごく嬉しかったですね。

石川 毎年7月には千鳥ヶ淵で戦没者追悼式をしているんですが、司会などは平和使節団に参加した高校生にやってもらっています。

あそこは無名戦士の墓です。いつも思いますのは、若くして亡くなり、しかも名前も分らないままの方たちのことです。こんな悲劇はありません。今も100万を超える遺骨は還ってきていません。こうした悲劇を繰り返さないよう、平和な未来を作っていくのは若い方たち。だから彼らに式典をリードしてもらうことには意味があると思っています。

若い人たちには戦争を生き抜いた人の話ができるだけ聞いて、語り継いでもらいたいですね。憲法を含め、戦後の平和を守ってきたのは戦争経験者です。この70年間の価値をぜひ次の世代に継承してもらいたいんです。

渡辺 本当にそうですね。70年間、人を殺すことも殺されることもなく。

石川 それも、話すだけでは消えてしまいきます。ものとして残さなければいけない。この戦争体験記録集を作ったのも、そのためなんです。今回は中学生や高校生、大学生らがインタビューを務めました。戦争を経験した方々の思いを若い人たちにじかに受け止めてもらいたかったです。

渡辺 私も朗読劇をやっていると、聞いたり一緒に読んでくれた子供たちが、次は僕たちが語り継いでいきますと言ってくれます。嬉しいことです。こうして何かの種を蒔いているんだな、と感じます。

石川 毎年、平和使節団で行く中高生は千羽鶴を持って行きます。区内あちこちの子供の

施設で折ってもらえます。その意味は、折った子供の心にも刻まれます。そして、その子たちも中学生くらいになると今度は現地に行こうかという話になる。毎年10人ずつのバックグラウンドには、相当の数の子供たちがいます。そうやって長い時間をかけて、戦争のこと、未来のことを考えていつてもらいたい。私も渡辺さんも、これからそう長く生き続けるわけではありませんからね。未来はもう始まっているという思いなんです。

渡辺 私もいつまでできるか分からないですが、できる限り種を蒔き続けていきます。

石川 種から花を咲かせるには、空気や水や肥料も必要です。渡辺さんが続けておられることは、種だけでなく、清冽な空気や水、肥料を注ぎ込む活動でもありますね。

渡辺 ぜひ千代田区の方でも、水と肥料をお願いしますね。

石川 そうありたいと思います。今日はありがとうございました。